競技スポーツ界におけるドーピング問題に関する倫理的一考察

An ethical study on doping issues in competitive sport circles

1K09B135

指導教員 主査 友添秀則 先生

土田 洋輔

副査 杉山千鶴 先生

【本研究の動機・目的】

私は中学入学時から、大学4年までの10年間陸上競技を続けて、陸上競技を中心としてスポーツと関わってきた。スポーツが身近であるが故に、オリンピックや世界選手権におけるドーピング違反による試合出場資格の停止、獲得メダルの剥奪などの報道は、自分にドーピングは悪だという意識を更に強めた。

現在も様々なドーピング違反の事件が起こっている中、世界アンチ・ドーピング機構が中心となって、アンチ・ドーピング活動を行っているにも関わらず、ドーピング違反件数は一向に減少しない。こういった事態の背景にはどのようなものがあるのかについて調べたいと思い、本テーマを設定した。

【本研究の方法・限界】

本研究では、ドーピングに関連する文献の分析を行う。特に、WADAの資料や、ドーピングに関する倫理的な考察を行っている論文を対象とした文献研究の形を取る。そのために、第一章ではドーピングに関する予備的知識と概要、第二章では過去のドーピング事例を取り上げた。

本研究では、取り上げる事例については、代表的なものに限定した。また、「世界ドーピング防止規程」、「禁止表国際基準」、「監視プログラム」を参考資料として使用するが、その都度更新されているため、2012年時点での最新のものを使用した。

【第一章】

本章では、ドーピングに関する予備的検討を行った。

本章第一節のドーピング小史では、ドーピングの由来、ドーピングが行われてきた、代表的な事例を辿り、その結果WADAの設立に至った経緯を書き記した。

本章第二節では、ドーピングの定義と禁止規程についてまとめ、IOCとWADAの定めるドーピングの定義の違いを述べた。禁止規程については、WADCordの各項目の概要をまとめた。

本章第三節では、国内外機関におけるドーピングに対する対応について取り扱った。JADAの設立経緯、WADAとJADAの関係、WADAとJADAのドーピングの対する姿勢について記し、また、その異同について確認した。

【第二章】

第二章では、過去の代表的なドーピング事例を振り返り、倫理的にどのような問題があるかを精査した。

第一節のカトリン・クラッベの事例では、ドーピング防止規程の不備が問題となったことを取り上げた。この事例では、禁止効果ではなく、禁止薬物を指定していたがために、結果としてドーピング違反に問われなかった点を問題として挙げた。

第二節では、中国人選手の大量のドーピング違反について取り上げた。国家の強制によってなされた事例であり、選手自身に自己決定権が与えられなかったことを問題として取り上げた。

第三節のベン・ジョンソンの事例では、ベン・ジョンソン自身が、自ら選択してドーピングを行っていたため、自己決定権の概念から見ると、倫理的に問題がないという結論に至ってしまう点を証明した。以上のように第二章では、3の事例を取り扱ったが、各事例によって倫理的問題は様々であったことをまとめた。

【第三章】

第三章では、第二章取り下げた過去の代表的な3つのドーピング事例を踏まえつつ、ドーピング禁止論に対する再検討を行った。その中で、現代の社会では、自己決定権が最大限認められなければいけなく、その決定が他者へ迷惑をかけることがないならば、多少のエゴとして認められ、その結果、医学的理由というドーピング禁止論は決定的なものではないことが示された。

また、ドーピングは選手の身の周りの環境の一種に含まれるという考え方から、「認められている不公平さ」の一つに含まれてしまうという指摘も確認した。スポーツ界の規範に反するというドーピング禁止論も、決定的なものではないことが示された。

【本研究のまとめと今後の課題】

本研究では、過去のドーピング事例を、現在のドーピングの禁止理由に当てはめて、倫理的検討を行った。しかし、自己決定権からの見解では、限界が示された。それゆえ、今回は、スポーツ固有の価値という別の視点から、スポーツ文化の保護と将来世代への継承の重要性を指摘した。

本来ならば、自己決定権という視点からの考察を深めなければならなかったが、その問題性を指摘するにとどまり、考察までには至らなかった。その点が本研究の課題として残っているので、今後改めて取り組んでいきたい。